

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナッシングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

2021年ドイツ軍人慰霊祭

-今年もコロナ対策のため規模縮小にて開催-

第27回ドイツ軍人慰霊祭が当協会の主催により、秋晴れにも恵まれ10月24日(日曜)午前11時から船橋市営習志野霊園にて執り行われました。



昨年同様に新型コロナウイルス感染拡大防止のため参加自粛をお願いして規模を大幅に縮小し、来賓として在日ドイツ連邦共和国大使館武官カルステン・キーゼヴェッター陸軍大佐及びクルザフスキ海軍曹長を迎え、武官室の青山氏、海上自衛隊の本名一等海佐にも参加いただき、宗宮名誉会長他の協会役員有志を合わせて18名の小規模な慰霊祭となりました。

慰霊祭は、杉田事務局長を中心に会場が設営され、本橋常任理事の司会で始まり、ここに眠るドイツ兵士に黙祷を捧げ、ドイツ連邦共和国国歌斉唱の後に、主催者として金谷会長より追悼の辞がありました。

会長からは、来賓及び参加者への謝辞に続き、当時の収容所では、約1,000人の兵士がハーグ陸戦条約の「捕虜は人道的に扱うべし」を基に自由に市民とも交流し、音楽、スポーツ、ソーセージ作り等の日常生活を過ごしたこと、一般人による見学会では見学者が捕虜から瓶の中に船を飾った「ボトルシップ」をもらい、習志野市役所に保管されていることが紹介されました。



しかし、1918年から世界中で大流行したスペイン風邪で25名、病死者を含め30名の兵士が亡くなり、その墓は、元陸軍軍人の石崎申之氏及びご子息の満氏、更には、陸上自衛隊第一空挺団の方々には守られて、1996年に創立の当協会が第一目的として慰霊祭を開催している経緯も説明されました。また、慰霊碑の前方に立つ協会創立時に植えられ、会報誌名になっているドイツ柏 (Die Eiche) の木のルーツも説明され、来年はコロナが終息し盛大な慰霊祭が開催できることを願っています、との締めくくりの言葉がありました。

来賓としてキーゼヴェッター武官は日本語で挨拶をされ、ドイツ武官として皆様と習志野で亡くなったドイツ兵を戦争の犠牲者として慰霊できることを誇りに思います。



今でも世界には沢山の紛争があり、平和は当然のものではなく努力して得るものです。日本とドイツは過去の戦争の記憶と未来の平和への責任を共有しており、毎年、慰霊祭は、日本とドイツの友好関係に多大な貢献をしています。

今年は日独交流160周年記念の年ですが、これからも相互の関係が深まりコロナが終息し、皆が平和に暮らせることを祈っています、

との挨拶がありました。

引き続き、本橋常任理事より、コロナで参列を控えていただいた来賓先からの挨拶文の代読が行われました。(挨拶文から抜粋)

【千葉県総合企画部千葉の魅力担当部長 山口幸治様】

「皆様の長きに渡る日独交流発展寄与に敬意を表します。本慰霊祭のおかげで、この地でドイツ兵と住民との温かい心の触れ合いや豊かな文化交流があった史実が今も伝えられています。新型コロナウイルスの感染拡大により、触れ合いが制限されましたが、お互いに尊重し、未永く本慰霊祭が続くことを期待します」

【船橋市長 松戸徹様】

「平和の尊さを語り継ぐことが大きな課題であり、平和や戦争を考える機会となる慰霊祭がコロナ禍で開催されることは、スペイン風邪で命を落とされたドイツ軍兵士の方々の為にも大きな意義を持つものと考えます。慰霊祭を通じて、日本とドイツの友好親善・相互理解の深まりと、世界の恒久平和を心から祈念いたします」

【習志野市長 宮本泰介様】

「習志野収容所では人々が希望を失うことなく心を通い合わせたことは、まさに今、私たちが最も学ぶべき教訓であります。歴史から多くのことを学び語り継ぐことこそ、異国の地で亡くなられた方々への何よりの鎮魂になるものと信じています。日独両国の更なる友好の進展達成を祈念いたします」

次に御霊の紹介として、植松理事より墓下に眠る30名のドイツ兵士名と階級が丁寧に読み上げられました。



最後の献花はキーゼヴェッター武官による大花輪の捧呈に始まり、名誉会長、会長をはじめ参加者全員が白菊を慰霊碑の前に捧げ30名の兵士の冥福を祈りました。

当協会創立25周年目の慰霊祭は、新型コロナウイルスパンデミックの為に小規模で直会も中止となりましたが、先人の思いを繋ぐことが出来、ドイツ大使館との関係も深まり、来年につながる慰霊祭として滞りなく終了いたしました。(常任理事: 志賀 久徳)

新理事の抱負-理事着任に当たって

こんにちは。新しく理事になりました草本といいます。(とはいえ、理事になった時期が新型コロナウイルスの感染拡大と重なったため、実際に会員や理事の皆さんと顔を合わせる事がほとんどなく、実感はあまりないのですが。) 私は現在、柏市にある麗澤大学でドイツ語を教えていて、ドイツへ日本人学生を送り出すことも仕事にしています。その関係で、たとえばこれまで、北ドイツ・ロストック市の独日協会の皆さんのおかげで、学生たちが現地の人々と交流を持てたといった経験をしてきました。そういったことから、私も理事としてドイツの皆さんに対して、少しでも恩返しができるようなことをしたいと考えています。千葉県には、ドイツやドイツ文化を愛する人が多いという個人的な印象がありますが、そういった人々が集まり、心の交流ができる機会を増やしていけるよう尽力していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします! (理事: 草本 晶)



近現代の旧ドイツ領と日本

- 講演内容報告 衣笠太郎 (会員) -

2021年12月4日(土)に当協会主催、日独交流160周年記念講演会が開催されました。講師は、衣笠太郎 秀明大学助教、参加者47名、講演中、数多くの質疑応答がなされ、本題に対する参加者の関心の強さを感じることができました。尚、当講演は、ドイツ大使館後援による「日独交流160周年記念講演会」対象プログラムとなります。以下、衣笠氏のからの講演内容についての報告となります(当講演担当: 勝見)

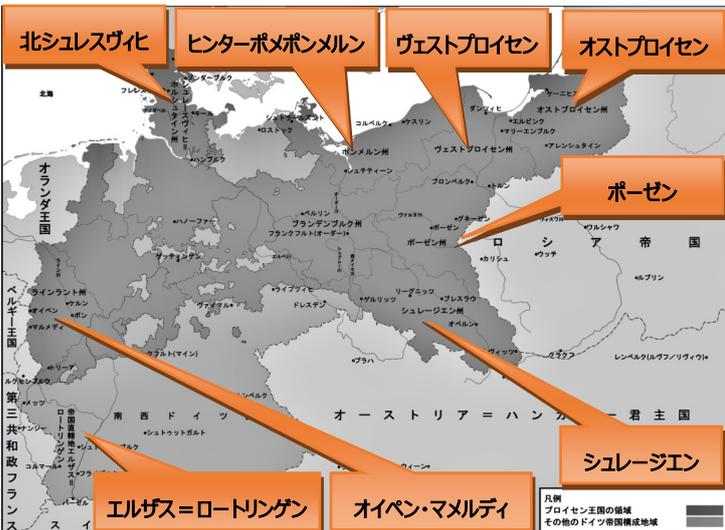
本講演は、拙著『旧ドイツ領全史』(パブリブ、2020年)をベースとしながら、「日独交流160周年記念関連事業助成対象」プログラムということ considering、旧ドイツ領と日本との関係にも光をあてる企画でした。とはいえ、90分で旧ドイツ領全域について満遍なく紹介するのは困難であるので、ここではシュレージエン(シロンスク/スレスコ)に焦点を当てながら、旧ドイツ領の多様性・多層性を取り上げています。



講演の前半は、基本的には『旧ドイツ領全史』の内容紹介です。第一に、「旧ドイツ領」とは何か、その歴史について考える意味、その際に注意すべき事柄などの論点を取り上げました。本講演では、「旧ドイツ領」を「1871年に成立するドイツ帝国以来の(ドイツ統一国家)に属したが、そののちにその領域から切り離された諸地域」と定義しています。この領域は、ドイツ帝政期の行政区分例えば、オストプロイセン、ヴェストプロイセン、シュレージエン、ポーゼン、ヒンターポンメルンという5つの東部領土、およびエルザス=ロートリンゲン、北シュレーズヴィヒ、オイペン・マルメディという3つの西部領土、計8つの地域から構成されるものです。

そうした地理的条件を念頭に置いたうえで、旧ドイツ領の歴史を考える際には「国民史」という歴史叙述の枠組みが問題となります。国民史において想定される国家は、様々な面で理想的かつ均質な領域や人間集団を念頭に置いており、その主たる記述対象は必然的に言語的・宗派的に多様で、かつ他国と近接している旧ドイツ領のような境界地域ではありえなかったのです。こうした意味で、従来の歴史叙述では旧ドイツ領は無視されるか、国民史の中で分断されてきたと言えます。

第二に、19世紀のドイツ領シュレージエンの言語・宗派・政治をめ



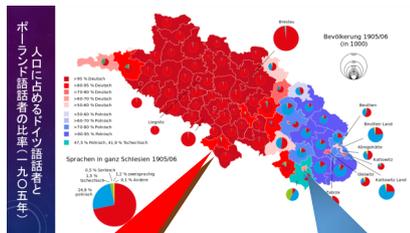
ドイツ帝国 (1871-1918) の領域

ぐる状況を紹介しました。一口にシュレージエンと言っても、ドイツ話者とプロテスタントが大多数を占めるニーダーシュレージエンと、ポーランド話者とカトリック教徒が比較的優勢なオーバーシュレージエンに大別できます。例えば、このうちオーバーシュレージエンでは、職業選択上の制約を主因として、ドイツ話者の数が徐々に増えていくという展開が19世紀後半を通じてみられました。また宗派的には、ビスマルクの文化闘争に対して、カトリック系住民が中央党を中心に結集して抵抗拠点を形成したのです。



ZOOM講演中の衣笠講師

講演後半では、シュレージエンを中心としながら、近現代の旧ドイツ領と日本との関係性を考察しました。ただしここでの議論は、講演でも示すように先行研究を活用したものであり、私のオリジナルではないという点は確認しておきたいです。ここでは第一に、日本から旧ドイツ領への眼差しが重要な題材です。1910年頃の日本では、台湾や朝鮮の植民地統治との連関から、ポーゼンやエルザス=ロートリンゲンなどのドイツ帝国の境界地域への注目が高まっていたのです。歴史学者であった坂口昂はそうした諸地域への学校視察を申請するが、それに対してプロイセン側は視察を拒否する対応を取りました。第二に、坂田快太郎の残した絵葉書に関する論考から、帝政期の日本人留学生がシュレージエン州ブレスラウでどういった体験をしたのかを追体験しました。坂田は岡山県出身の外科医で、1900年よりブレスラウ大学にて医学を学ぶために同市に2年間滞在していた人物です。第三に、戦間期のシュレージエンと日本との関係を、当時出版された文献から考察しました。ヴェルサイユ条約を経て、シュレージエンはドイツとポーランドの間で分割されますが、例えば戦間期初期にはそうした領土紛争を招いたシュレージエンの鉱物資源への関心が高まり、それに関する地学分野での論文がいくつか発表されています。

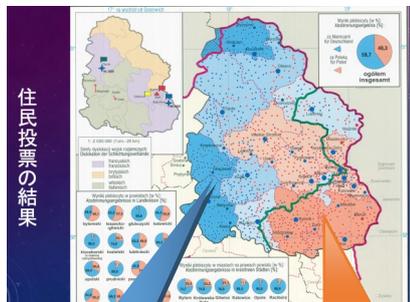


ドイツ話者多数 ポーランド話者多数

以上のように、少々まとまりのない講演となりましたが、少しでも多くの聴衆に旧ドイツ領の歴史を研究することの面白さを伝えられていれば幸いです。



プロテスタント多数 カトリック多数



ドイツへの帰属希望 ポーランドへの帰属希望



講演終了後の参加者の集合写真

講演終了後の参加者の集合写真

以上のように、少々まとまりのない講演となりましたが、少しでも多くの聴衆に旧ドイツ領の歴史を研究することの面白さを伝えられていれば幸いです。

オンライン食文化講演会 ＜オーストリアからマルツァイト＞ 参加報告

食欲の秋に向かう9月5日、オンライン食文化講演会＜オーストリアからマルツァイト＞が開催されました。東京・赤坂のドイツ・オーストリア料理レストラン「Mahlzeit（マルツァイト）」から中継されるこの催しは、日独文化協会主催で4回目となります。当協会は（公財）日独協会と共に2回目の開催協力でした。参加申し込みは67名。参加者による当日メニューの注文は165名分でした。

今回のテーマは「ハプスブルク家が愛した料理」。日本・オーストリア食文化協会会長飯田章氏の講演で始まりました。一流ホテル、ガストハウス、ホイリゲ*、バイセル**、ビアレストランの違い。ハプスブルク家に縁のある宮殿やそこでのテーブルセッティング。代表的なウィーン料理。次々に映し出される豊富な資料と飯田氏の名解説が繰り広げられました。



ZOOM講演中の飯田講師

次に厨房から本日のメニューであるカボチャスープ、カイザーシュニツェル（仔牛肉の薄切りソテー）、ポテトヌーデル（じゃがいものお団子）、アプフェルシュトゥルーデル（リンゴのパイ包み焼き）の調理が中継されました。飯田氏とMahlzeitのシェフ山口雅鷹氏の料理におけるちょっとしたコツや手際の良さを見られるだけでなく、疑問にその場で答えてもらえるライブ感もあり、オンラインの良さを十分感じました。



完成したオーストリア料理

最後は活発な質疑応答が行われ、話はドイツ料理とオーストリア料理の違いにもおよびました。ドイツ料理は風土に根差した郷土料理的なものであること、オーストリア料理はハプスブルク家の領土拡大によって外からの料理を取り入れ洗練させたものであることなど、料理を通して様々なことを知る機会となりました。

*ウィーン近郊でその年の新酒の自家製ワインを飲ませるレストラン。

**Beisel(Beisl)：オーストリアで酒場、飲み屋の意味。Kneipe。

（常任理事：土屋 有里）

第2回オンラインシュタムティッシュ 開催報告

シュタムティッシュ「教えてアネットさん、こんな時なんて言えいいの？」が7月18日と8月22日、2回にわたってオンライン「Zoom」で行われました。ホストは第1回に引き続き植松 アネットさんとご主人の植松 健理事。参加者は10名（会員9名、非会員1名）、スタッフ3名の総勢15名でした。

ドイツ人宅に招待された様々な場面を想定し、ドイツ式マナーや、日常会話を中心にドイツ語と日本語を交えて展開していきました。「手土産は必要？」「xxな時はドイツ語でどう表現する？」等々の質問に対して、アネットさんがドイツ語で丁寧に答え、Herr植松が日本語で補足。参加者からはドイツでの体験談や、ドイツ語表現に関する質問が次々と飛び出します。また毎回最後には「ちょっとためになるドイツ語の表現」があり、オリンピック・コロナ関連用語を教わりました。



ホストのアネットさん & Herr植松（中段中央）

アネットさんとHerr植松には、企画の他、配慮の行き届いた当日の司会進行、後日内容をまとめたメモまで作成していただきましたので、シュタムティッシュ中は会話に集中し、皆さんと楽しい時間を共有できました。次につながる、様々な可能性があるオンラインイベントだったと感じています。Danke schön!!

（常任理事：本橋 緑）

イベント「いちかわドイツデー」 活動報告

市川市とドイツのローゼンハイム市とのパートナーシティ交流の一環として、市川市とコルトンプラザの共催により実施されている「いちかわドイツデー」は今年もコロナ感染拡大防止の為に中止となりましたが、小規模なパネル展示会のみ10月4日から9日までツッケコルトンプラザのタワーコートで開催されました。展示会には当協会の他、2団体が協力団体として出展し、6日間に渡り多くの人々の注目を集めました。



パネル展示全景

当協会のパネルは中心部に設置され、主に吉川常任理事作成の慰霊祭、講演会、ドイツと千葉、の写真と説明の展示を行い、本橋常任理事作成のドイツ語講座、シュタムティッシュ、市川市の菩提樹の写真を加え、協会案内の新しいチラシも自由に持ちけれるようにしました。

昨年来、コロナ禍で多くのイベントが中止となる中において、久しぶりの広報活動となりました。

（常任理事：志賀久徳）



千葉県日独協会の展示パネル

日独交流150周年記念菩提樹

その後の成長 No.7

-Die Linden in Salura
und Sodegaura-

はじめにご紹介するのは印旛沼サンセットヒルズにある菩提樹です。「佐倉幸せの鐘」の横で育っています。オートキャンプ場の敷地内ですが、眺望だけでも立ち寄りもできます。空気の澄んだこの季節、印旛沼越しに見える富士山やスカイツリー、そして雄大なサンセット。美しい景色も合わせて楽しんでみてはいかがでしょうか



印旛沼サンセットヒルズ
2018/6 北村侑三郎理事撮影

次にご紹介するのは、東京ドイツ村に育つ2本の菩提樹です。広い園内ですが、2本ともフラワーガーデンエリア内にあります。樹名札を頼りに、宝探し感覚で散策しながら探してみてくださいね！



東京ドイツ村
2019/7 北村侑三郎理事撮影

同園では現在「東京ドイツ村ウィンターイルミネーション 2021-2022」を開催中です。圧巻の夜景を是非ご堪能ください。



観覧車からの展望
東京ドイツ村提供

各所の日独交流150周年記念菩提樹の紹介は今月が最後になります。菩提樹は落葉樹ですので今は幹と枝だけの姿でしょう。ですがよく観察すると枝に芽がついています。来春そこから新葉が芽吹きます。是非何度でも足を運んでいただき、四季折々の姿を観察し、一緒に見守っていただきたいと思います。

・印旛沼サンセットヒルズHP:

<http://sunsethills.shiteikanri-sakura.jp/>

・東京ドイツ村HP:

<https://t-doitsumura.co.jp/>

書籍/Buch

1964

Vier japanische Studenten erkunden Westdeutschland -Tagebuch einer Forschungs-Rundreise, Indicium Verlag, 2021

本書は、東京オリンピックが開催された1964年に、早稲田大学ドイツ研究会の4名の学生（佐藤勝彦、瀧沢敬三、野中宣義、伊藤文夫の4氏）が、33日間の船旅のあと、約半年にわたって西

ドイツの大学18校と64都市を訪問し、ドイツと日本の交流を図ったその足跡をまとめたものです。ドイツ旅行などまだ気軽にいけなかった時代に、苦労を重ねてドイツを自転車とレンタカーでまわりながら現地の人たちと交わった進取の精神にあふれた痛快な内容の本です。「日独交流160周年」に当たり、このほどドイツの出版社から独語版が刊行されました。日本語版は、『西方見聞録』というタイトルですすでに出版されています。本書を拝見し、昔ベストセラーになった小田実の体験記『何でも見てやろう』を思い出しました。現在では味わうことができない20世紀なかばの若者の貴重な異文化体験の記録が、独訳の刊行により、今後は日独両国において後世に未永く引き継がれていくことでしょう。なお独語版は、メンバーのひとり瀧沢敬三氏の日記をもとに、団長をつとめた佐藤勝彦氏によってとりまとめられました。佐藤氏は長年三菱商事の国際畑で活躍され、現在は（公財）日独協会理事のほか、プレーメン経済工科大学客員教授等を務めておられます。（副会長：木戸裕）



独日協会アム・ニーダーラインへの義援金送金についてのご報告

本年8月7日付け「デュッセルドルフ地域での豪雨・洪水で被災された方々への義援金の募集(依頼)」に関しまして、多くの会員の皆様より義援金をお寄せいただきました。深く感謝申し上げます。総額¥205,000を9月8日に独日協会アム・ニーダーラインへ送金し、先方より受領とお礼の連絡を頂いております。被災地での復興は進んでおらず、支援を必要としている方にお届けしたい、との事です。

今後の予定

■新春講演会

2022年1月30日（日）

新春講演会 ハイブリッド形式（対面式、オンライン「ZOOM」）にて開催

時間： 15:30 - 17:30

場所： 船橋市中央公民館 第3集会室（対面式）

講演者： 千葉県日独協会 金谷誠一郎会長

演題： 「千葉県日独協会の25年を振り返って」

●詳細は同封の案内状をご参照ください

●講演会後の懇親会につきましては見送らせていただきます

会員情報

新人会員 本名 龍児 東京都世田谷区

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人

清和会、(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事

編集後記

2021の活動を振り返ってみますと、コロナ感染の影響により、対面での活動はできませんでした。運営委員会等の各種打合せもすべてオンラインベースで行い、組織運営がなされてきました。このような制限下での活動を余儀なくされつつも、オンラインベースとしたドイツ語講習、シュタムティッシュの実践、青壮年部の活動の一環としてドイツ人ゲストを交えての座談会、Die Eiche 協会設立25周年特別号の発行、「近現代史における旧ドイツ領と日本」の講演の実施等々、多彩な活動が組織的にできたのではないかと考えています。環境変化にも柔軟に対応しつつ、コロナ情勢も冷静に捉え、従来同様の対面での協会活動を含め、2022年の活動も積極的に活動したいと考えています。（勝見 浩明）